【 44 】

氏　　名	安立奈歩（あだちなほ）
学位(専攻分野)	博　士（教育学）
学位記番号	教　博　第 39 号
学位授与の日付	平成16年9月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	教育学研究科臨床教育学専攻
学位論文題目	個人内過程および対人関係過程における攻撃性のあり方に関する研究
論文調査委員	（主査）教授 岡田康伸　教授 山中康裕　教授 伊藤良子

論文内容の要旨

本論文は心理臨床現場において，大きなテーマになっている，人間の持つ攻撃性について，心理臨床学的観点から，著者の心理臨床体験を背景にもちながら，青年期を中心におこなわれてきた研究をまとめたものである。

第一章では「攻撃性に関する先行研究の概観」と題され，攻撃性についてのレビューをした。ローレンツの動物行動学からの攻撃性やストーや土居らの動物と人間の攻撃性の共通性と差異性や心理学における攻撃性などをレビューした。さらに心理臨床学における攻撃性の理論は(1)心のエネルギーという見方と(2)無意識領域に存在する心のエネルギーにおける破壊性と創造性という2面が重要であるなどとする。

第2章は「青年期の攻撃性に関する実証研究—境界例心性の観点から—」と題され青年期の攻撃性に関して境界例心性の観点から質問紙法による調査研究がなされた。調査には境界例心性質問紙（37項目，6件法）と対人関係質問紙（18項目，7件法）とマレー版TATの2，3BM，12F図版が使用された。被験者は大学生（18歳—23歳）174名（男性94名，女性80名）である。TAT図版では境界例心性の高い者と低い者との比較から，自己の安定感，対人関係の葛藤，対象喪失により生じる悲哀の過程，自己の二面性の受容といった点で違いがみられるなどの結果を得た。

第3章は「攻撃性の諸相に関する実証研究」と題されて，従来の定義に対する批判的検討をほどこした。例えば，「攻撃性は行動か」など4つの側面より考察した。この批判的考察に基づき，著者は攻撃性を「攻撃性とは“能動的な力”と“破壊的な力”の二面を持つ。前者は外界への適応行動を発動させ，自尊心の基礎ともなる。後者は，無意識の次元から発せられた衝動・欲動が，内的対象関係の次元で処理されることによって，自他に方向づれられる—」と定義し，3つの目的（攻撃性質問紙を作成すること，攻撃性の諸相について検討すること，攻撃性の諸相について，他者との距離のとり方の観点から検討すること）をあげる。攻撃性質問紙（42項目，6件法）と再接近期的葛藤質問紙（30項目，6件法）の2つの質問紙を被験者343名（男性174名，女性169名）に実施した。

なお，この被験者は3章から6章まで同じである。したがって，このとき同時に，第5章の自己調整質問紙（23項目，6件法）と第6章のバウムテストが実施されていたことになる。

攻撃性質問紙は因子分析により，5因子（対象破壊行動，積極性行動，自責感，自己破壊行動，猜疑心）を得て，因子構造の検討および，個々の因子についての検討を行なった。また，再接近期葛藤質問紙は「対象希求」と「接近恐怖」の2因子からなることを確かめた。

第4章は「攻撃性の類型化に関する実証研究」と題された。攻撃性の諸側面が，個人内にどのような力動関係で存在するのかについて，第3章の結果を基に，類型化することを目的とし，攻撃性質問紙の5つの因子得点を変量としたクラスター分析の結果，5クラスターを得た。攻撃性のあり方に関する5つのタイプのイメージおよび「積極的行動」因子の持つ意味について，5つのタイプの間で異なっていることから，能動性の持つ多様性について，論じられている。

第5章は「攻撃性の創造的側面に関する実証研究」と題される。創造性の観点を自己調整という観点にうつして，攻撃性

と自己調整との関係をしらべた。斎藤の考えを基に自己調整が「個体内プロセスと対外界プロセスとの両方にかかわって，不均衡と均衡との間の動的過程にたずさわるはたらき」であるとみなしたためである。自己調整質問紙は5因子（創作活動・創造物とのふれあい，関係性の希求，思いの文章化，関係性からの退却，身体の活性化）が得られた。興味深い結果として，たとえば，「創造活動・創作物とのふれあい」で，女子が男子より有意に高い。また，自責タイプのうち男子の得点が女子の得点より「関係性の希求」で低いなどがあげられる。

第6章はバウムテストにみられる攻撃性の諸側面に関する実証研究」と題された。攻撃性が顕著である“自責タイプ”“行動化傾向タイプ”“積極的行動タイプ”においてバウムテストにどのようにな特徴がみられるかを調べ，「幹のエネルギーをどう方向付け伸ばしていくか」という「分化」の視点から考察された。

第7章は「心理療法の関わりからみる攻撃性の諸相―破壊性と創造性の両面から―」と題される。2つの事例（A：15歳，女性，希死念慮のある不登校の思春期女子との面接とB：46歳，男性，対人関係を結べなさを抱える無職の中年期男性との面接）に基づき，実証研究では扱えなかったものを手がかりとして，個人内過程と対人関係過程に焦点をあて，攻撃性について考察した。事例Bは主として，斎藤のコメントをもとに考察されていた。

論文審査の結果の要旨

本論文は，心理臨床体験から発想されたことが，まず，明らかにされた。すなわち，著者の携わった最初の事例が，エネルギーに満ちた自傷や非行などを犯す子で攻撃性を考えざるを得なかったことがキッカケになって攻撃性をテーマに研究してきたことが明らかにされた。

著者は実証研究と事例研究の二つの方法でなされた研究をまとめたと主張する。そこで，質問紙法によって統計的に得られた結果の考察を実証研究と言い，事例に基づく研究を事例研究といっている。しかし，事例研究も実証研究ではないがと指摘された。この指摘をめぐって，もう少し事例研究について考えていくべきであろうと話し合われた。

ところで，第7章の事例研究で示されたものが本研究のきっかけとなったケースでなく，事例A事例Bであった点が問題にされた。事例A，Bともに著者が主張するほど，ここでの実証研究を補っていないのではないかなどと話し合われた。確かにそれ程，事例報告の中で明確には記述されなかったが，著者の中では事例AもBも秘められた攻撃性と又，クライエントなりの創造性が感じられていたという。そして著者が主張した攻撃性の2つの側面，すなわち破壊性と創造性の両面が焦点付けられた事例であるという。著者の最初の事例はまだ言葉にすることが困難で，著者の心の中にあるなどと話し合われた。

攻撃性に関するレビューにおいてはローレンツの動物行動学の観点から社会心理学的観点，フロイトやユングの考えやウィニコットの関係性の観点までよく言及されていると評価された。しかし，これだけ丹念にレビューしていくと，攻撃性の層が問題になってくるのではないかと指摘された。攻撃性の層の問題が事例を考察する時役立つのではないかなどと話し合われた。

攻撃性は心理臨床にとって重要な大きなテーマであり，それに挑戦していたことが評価された。従来の特に社会心理学的領域において盛んにおこなわれている攻撃性の定義を批判的に検討した。例えば攻撃は行動そのものに着目することよりも背後にある心理機制との関連で状態像を捉えてゆくといった心の働かせ方が必要であると主張したことや意図をこえて生じることや攻撃性の中に能動的な力を考えるなど重要な点が評価された。

また攻撃性を個人内過程と対人内過程という2つの視点から考察し，両面を重視した発想は斎藤の考えをベースにするにしても，高く評価された。ここから著者は攻撃性を(1)心のエネルギーという見方と(2)無意識領域に存在する心のエネルギーにおきる破壊性と創造性という2面から考えていると主張してる。著者が攻撃性の定義で示した破壊性と能動性や実証研究から言及した創造性をめぐって検討され，特に能動性や創造性が攻撃性という概念に含まれていることを示そうとしている努力などが評価された。

第2章から第6章までは実証研究による。さまざまな興味深い結果が出ていると評価された。たとえば，攻撃性質問紙をそれなりに制作したことや攻撃性のあり方に関する5つのタイプのイメージおよび，「積極的行動」因子のもつ意味について，5つのタイプの間で異なっている可能性が示唆され，能動性の持つ多様性の一端に言及したことなどが評価された。し

かし，２章のTATや６章のバウムテストの投影法との関係では，質問紙による群分けとTATやバウムテストの特徴とを結び付けているだけで，投影法から伺える攻撃性についての考察が見られなかったのは残念であると指摘された。これは攻撃性の層の問題とも結びつくかも知れず，今後の問題と考えられた。

事例の提示・記述はもう少し著者の言葉やコメントがあった方がよいであろうと指摘された。とくに，事例Ｂでは，斎藤のコメントが中心になってしまって，著者自身の考えをもっと考察すべきであろう。少し斎藤のコメントに依存しすぎているが，論文の価値を損なうものではないと話合われた。

以上いくつかの点で，新しい視点が提起され，博士論文として評価される水準に達していることが認められた。

よって，本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また，平成16年８月16日，論文内容とそれに関連した試問を行った結果，合格と認めた。